

本因坊算砂の人物像と 囲碁将棋界への技術的功績を再検証する

囲碁将棋界の基礎を築いた400年前の「伝説の棋士」

古 作 登

はじめに

本因坊算砂（1559～1623）は安土桃山時代後期から江戸時代にかけて活躍した日本の囲碁界の基礎を築いた棋士である。僧としては若くして学僧となり後年日海の法名で法華宗寂光寺の二代目住職を務め権大僧都の位に上ったほどであった。その技芸は囲碁ばかりでなく将棋においても発揮され、将棋一世名人大橋宗桂、二世名人大橋宗古との将棋対局の棋譜も残している。本稿では良く知られている僧侶、囲碁棋士、当時の呼称で「囲碁師」としての算砂はもとより「将棋師」としての視点からも再検証するものである。まずは法華宗僧侶、囲碁師としての算砂の足跡をたどっていく。僧侶としての算砂は寂光寺の先代住職で法華宗の代表的な僧、日淵上人の後継者としての人物像をこれまで記されてきた史料、論文から検証した。また当代一の囲碁師として現在に伝わる棋譜を現代のトップ棋士の目から見た論評を加えて、算砂の打った碁が後世の碁にどのような影響を与えたか分析した。最後に将棋師としての算砂を宗桂、宗古との棋譜を基にデータ並びにコンピュータソフトを用いて解析評価し、算砂の囲碁界将棋界に残した功績を総括する。

1 法華宗僧侶、囲碁棋士として

◎算砂と武将との関係

本因坊算砂は若いころ学僧だったという記録が残っている。僧侶としての算砂の師は

法華宗寂光寺開祖、初代住職の日淵上人¹⁾(1529～1609)である。算砂の法名は日海といい、日淵は早くから学僧としての実力を日海に見出し、住職の後継者であることを示す資料が寂光寺に残されている。

江戸時代末期の1849年に刊行された林元美『爛柯堂碁話』には算砂が織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三武将と囲碁を通じて接したという話が記されている。以下はその一例である。

碁所の始祖、本因坊算砂、法印日海、豊臣太閤の御時、天下の上手ども数輩の試みの碁手合わせ仰せつけられ候ところ、本因坊、諸人に勝ち越し候に付き、初めて碁所に仰せつけられ、手合わせ以下の法度(とりきめ)申し付くべき旨、御朱印御証文、これを成し下さる。時に御下恩など拝領す。天正十六年閏五月十八日なり。

同様のエピソードとして信長が本能寺の変で没する前日に同所で算砂と利玄の碁が打たれ、その際三劫が発生しこれをきっかけに「三劫は凶事の前兆」と言われるようになったという話は有名だが、古来「三劫の局」とされてきた棋譜が現在のプロの目から見ると三劫が発生する余地がない事が明らかになり、史実ではなく物語を面白くするために創られた説話と見る向きが現在の大勢である。

家康と囲碁界、将棋界のつながりについては日記や公的記録など多くの同時代資料が存在しているが、信長に関しては囲碁関連の記録は少ない。囲碁史研究家の香川忠夫氏は「本因坊算砂伝の諸問題」と題する発表を2008年の囲碁史会で行い、信長に関する一級史料である『信長公記』に碁に関する記述が一切ない事などを論拠とし、200年以上後に発表された『爛柯堂碁話』『座隠談叢』といった著作には史実と異なる点が多くあると指摘している。

一方、信長と算砂は算砂が若年のころにすでに顔を合わせていたという論説も存在する。

信長(1534～1582)が天下人だった期間の1579年に法華宗と浄土宗の間に安土宗論が起こった。立正大学名誉教授の宮崎英修氏は日淵が当時のことを口述した『安土問答実録』を基に「本因坊算砂の略伝」で以下のように論じ、安土宗論で日淵上人に随行していた若き学僧が本因坊算砂ではなかったと推測している。

本因坊算砂の人物像と囲碁将棋界への技術的功績を再検証する

日蓮宗側の常光院日諦、佛心院日珖、久遠院日淵（当時日諦は相当な老齡、日珖は四十八才、日淵は五十一歳、なお、日海は二十二才）の三人は信長の面前に引きすえられ、宗旨をかえるか、それとも一筋に命を思い切るか返答せよ、と責められ、速答はむづかしかろうからよく思案せよ、といつて、あとを奉行長谷川御竹、菅谷九右衛門、堀久太郎にまかせて帰ったがこの時、信長は垣谷伝介、普門院日伝が、宗論の首謀者であるというので、三人の面前で頸を刎ねて脅している。それから、「さて次にわれら三人の者にあの老僧はとありし時、日珖申さく、妙覚寺の学頭と、汝は堺の油屋浄祐が弟ならん、疑いもなくよく似たり。又仰せられるやうは、新発意シンボチか坊主かあるは何れぞとありし時日淵手をとられながら少し俯向す。その時仰せらる。年また若し、面の血の流れたるを御覧あつてあのやうにはすまじきものを、とあつて、その手をはなせ、いらぬことよ、とありし時、三人共に手を放つて六人の小人コモノ共も（の）きぬ」と記しているが、ここに「新発意（弟子）か坊主（住持）かがいる寺の住持とは誰か」とたずねていて、その上の傍書に、「碁打ち本因坊の事也」とある。

文中の「新発意」とある日淵に随行した有望な後継者が傍書が示すように若き日の日海、算砂であると宮崎氏は解釈し、日海はすでに信長にその名を思い出されるほどの出仕がされていたと推測している。ただし上記の文に続く一連の論説は『爛柯堂碁話』を改題した『因云碁話』の引用が多い。

信長と囲碁に関連した江戸時代初期の記録では『会津旧事雑考』²⁾がある。ここには本因坊という記述だけでなく算砂の師匠とされる仙也のことも書かれている。

天正元年癸酉、菅沼宗信在り、天性囲碁を能くす。郡に敵手なし。（中略）洛に至り本因坊と対奕せんことを望む、終に入洛、拳洛在囲碁之声者対奕、一人として亦敵手無し、則ち本因坊亦不得止、微服潜航誠対奕、打頭輸者二番、時に森蘭丸事を信長公に告ぐ、召して仙也と対奕せしむ、

また、翌天正2年（1574年）には信長が正倉院から碁盤を持ちだしたという記録が『天正二年截香記』に残されているし、天正3年の『兼見卿記』には信長に碁盤を贈った次のような記述が存在する。上洛した信長への贈り物として盤に菓子を入れて進呈し

たということだから、信長もある程度囲碁に興味を持っていたと考えることができるのではないだろうか。

三月十七日、丙辰、信長に見廻のため罷り出ず。作の碁盤、其の内へ菓子を入れ之を持参す。仕立の珍敷之皆之を感ず。一段懇之礼也。

算砂は将棋初代名人の大橋宗桂と将棋の対局をしたことでも有名だが、その宗桂に関する記述が『当代記』慶長十二年（1607年）の項にある。

此の時の上手、名は宗桂というものなり、是京都町人なり、此宗桂は、信長時代よりの指し手なり、今年五十三歳なり。

宗桂を表す記述の中に信長の名前が出ている。当時の武将や公家で盤上遊戯を好むものは将棋と囲碁の両方をたしなむものが多かったことは日記などから明らかである。『当代記』には信長と宗桂の関係は記されておらず、また将棋史に関する一級史料である権中納言水無瀬兼成³⁾の『将棊馬日記』に残されている将棋駒注文記録には家康が53組の将棋駒を注文したのを筆頭に、武将では足利義昭、豊臣秀次、豊臣秀頼など、天皇家も後陽成天皇、正親町上皇ら有力者の名が数多くあるが、信長の名前はない。信長は他の公家、大名と親しい囲碁師、将棋師と面識があったにせよ家康らのように好んで囲碁や将棋を観戦することはなかったと類推できる。日記や公的記録など、ここまで述べてきたように信長に算砂ら囲碁師、将棋師が直接技芸を披露したことを示す同時代の史料は現時点では見つかっていない。

◎棋譜を残すようになったのは算砂以降

続いて算砂の囲碁師としての足跡をたどってみよう。囲碁棋士としての算砂の少年期の棋譜は見つかっておらず、仙也という師について囲碁を学んだという記述があるのみである。算砂（寂光寺）も利玄（本能寺）も法華宗の僧侶であるが、当時の日記などから仏法の修業に差し支えない程度の範囲で囲碁の勉強をすることは許されていたと考えられ、それぞれの寺に碁の強い先輩がいてそこから学んだと推測できる。日本でも鎌倉時代から室町時代にかけて寺における漢詩の才は重要視⁴⁾され、囲碁に関連した棋詩も

残されている。

最古期の棋譜と呼ばれる物は天正年間の利玄との対局である。初手から終局までの棋譜が残っているのは少なく、多くは120手前後までの記録で、終局まで記されている棋譜は1970年代までは一局のみとされていた。しかし『囲碁大成』などその後に発見された資料を基に2007年『囲碁古名人全集』が刊行された。新たに記載された棋譜の中には手順の誤記と思われるものがあったりして完全ではない。一方、算砂が残した同時期の将棋の棋譜は終局まで完全なものとして23局が残されている。日本においてこの時代以前は棋譜を取るという習慣がなく、棋譜を取ることにそれほどの重要性を見出していなかったものと推測できる。日本に採譜の習慣を定着させた算砂、利玄らの功績は極めて大きい。

◎算砂、利玄、宗桂は囲碁将棋界の柱石だった

『伝信録』によれば1612年に算砂、利玄、宗桂らは家康より正式に扶持を得たと以下のとおり記されている。

一 慶長十七壬子年、権現様より下置かれ候御切米御書出しの写碁打衆将碁指衆御扶持方給し候事

一 五拾石五人扶持 本因坊

一 五拾石五人扶持 利賢⁵⁾

一 五拾石五人扶持 宗桂

一 五拾石 道碩

一 二拾石 春知

一 二拾石 仙重

一 三拾石 六蔵

一 二拾石 算碩

御切米合貳百九拾石

御扶持合拾五人扶持

右亥年分より毎年京枅を以て相渡し彼衆手形を取置き江戸御勘定相立らるべく候、

以上

壬子二月十三日

米 清右 判 (以下略)

ここに挙げた俸禄の支給に関する記述を見ると、筆頭の算砂の次に最も多く対局をしたと考えられる好敵手の利玄(利賢と記されている史料も相当数存在するが本稿では同一人物とみなす)それに続いて将棋を専門とした宗桂が同じ待遇で記されている。宗桂より年下の算砂が筆頭なのは僧として高い位にあったからだろう。また宗桂の子で後に二世名人となる大橋宗古(当時36歳)は相当な将棋の腕前を持っていたはずなのに文中に名がなく、算砂の弟子である道碩は五十石の扶持を与えられている。この文書に記された名は多くが囲碁師と推測され、当時の囲碁師の需要が将棋師の需要を上回っていた可能性を示している。

2 算砂の囲碁における技術的功績

◎現代にも通ずる感覚を持っていた算砂の碁

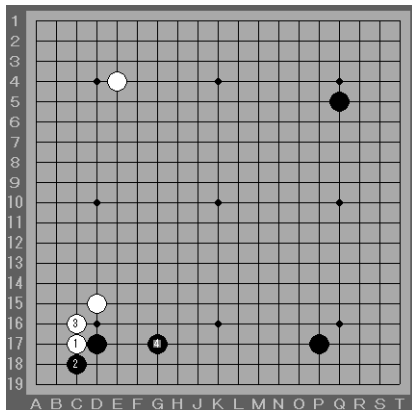
続いて算砂の打った碁を布石から終盤の入り口まで現代的視点を加えて検証し囲碁界に残した技術的功績について取り上げていく。日本囲碁大系第1巻『算砂・道碩』の文中で算砂「生涯の一局」と呼ばれた算砂と利玄の対局や、その後発見された棋譜を加え『算砂・道碩』の42年後に発刊された『囲碁古名人全集』を基データとし、その中から現代の感覚でも注目に値する着手、打ち回しを現役トッププロ、今村俊也九段の協力を得て解析した。なお本局の対局相手利玄については『当代記』(慶長十八年三月の条)に以下のような記述がある。算砂が本職の囲碁以外に将棋を得意としたように、利玄もまた中将棋⁶⁾を得意とし後陽成院と対局する機会がしばしばあったようだ。

五日、...碁打ちの本因坊、召しに依り院参す。碁の儀色々院宣有り。中にも仙人の打ちし碁の作物、直に院作有て、本因に見せらる。此時の院宣に、碁に別智ありと云ふ事は三家禄と云書物にこれ有、酒に別腸有と云ふは知らずと也。和云ふ、是は賓退の禄と云書物にこれ有りと承る。此書物さがの妙知院にこれ有。又月合の比、利玄、召に依り院参す。是へも右の作物同前なり、則ち利玄これを仕る。奇特の由宣下有り。利玄、院、中象碁を遊ばさる。本因、利玄は出家の為に依りて也。

何も法花宗也。さて右の兩人も駿府へ下る。院は中象碁天下一と思召す。

文中の後陽成院とは後陽成天皇（1571～1617）のこと。室町時代から安土桃山時代にかけて貴族も平安時代から愛好していた盤双六や囲碁ばかりでなく、小将棋や中将棋も遊戯としてたしなむようになっていたことは日記などに数多く記録されている。算砂と利玄の棋譜には対局日が記されているものがないため、取り上げた順に第1局、第2局と表記した。また棋譜の表記に関しては当時の棋譜の表記法が史料によってまちまちなため現代の棋譜と同じ右上隅に初手を打つ形式に統一した。また各図面の最終着手は石の数字の部分に「□」が付いている。

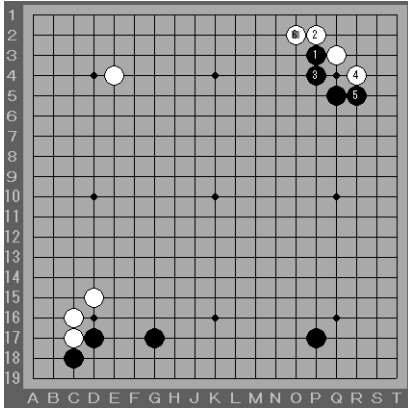
2-1 布石から中盤への構想 現代に通ずる定石、カカリの工夫、手筋と手順の妙



〈図-1〉

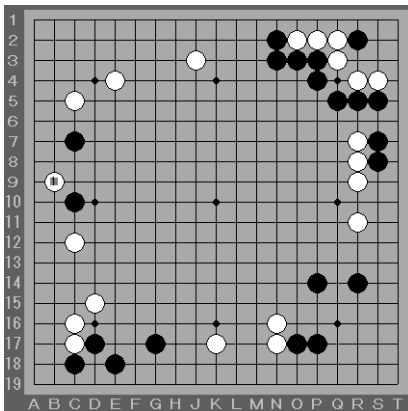
◎第1局 黒 利玄 白 算砂

黑白ともに高目から始まり、白は二隅目も高目と実利よりも外勢を重視した布石である。白1から3のツケヒキに対し黒が4（G-17）と二間にヒラいたのは利玄の着手、1975年の解説で岩本薫九段は「現在では殆ど打たれず中途半端で悪手、E-18にカケツグのが普通」と評する。しかし現代の感覚では、カケツギより軽くヒラく方が勝ると考えるプロの方が多いという。算砂と利玄の「盤上の対話」が生み出した400年前の布石感覚＝定石が21世紀に再評価されている。



〈図-2〉

右上で黒は1から3と外にツケヒキを打った。「左下の内へのツケヒキと使い分ける工夫が当時すでにあったことが素晴らしい」と現代のプロは評する。現代の解釈では4のコスミに対しO2と押さえられると白がわずかに損だが、5とオサえるのが当時の定石。6（O-2）と辺に頭を出しては白が地に辛くまずまずである。



〈図-3〉

続いて布石段階を終え中盤に差し掛かろうという場面が図-3、ここまでは白の算砂が巧みに打ち回し十分な態勢を築いたと思われる。その打ちやすさを具体的な良さにするために放ったのが白1（B-9）のオキ。打ち過ぎの可能性もあるが、二間にヒラいた黒の根拠を奪って攻め立てるこのオキは現代の碁においてもしばしば出現する手筋で、こうした厳しい手段が当時打たれていたことは現在のプロの目から見ても驚きだという。

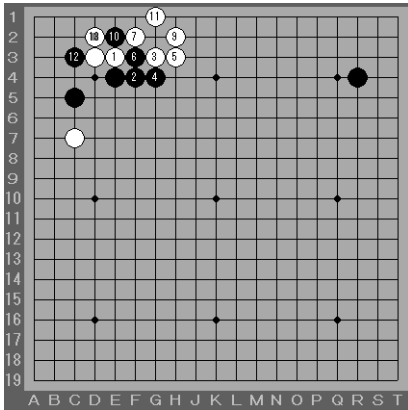
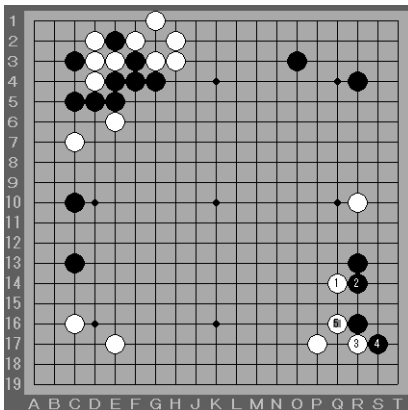


図-6 黒8 (G-2)

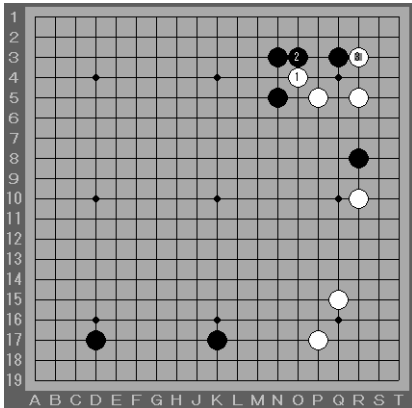
◎第2局 黒 利玄 白 算砂

黒のE-4のカゲに対し1と一本ハイを打ち3とトブのが現代でも定石とされている順。黒は8、10と捨て石を活用し、このあと左辺を大切するのが軽妙な打ち回しだ。



〈図-7〉

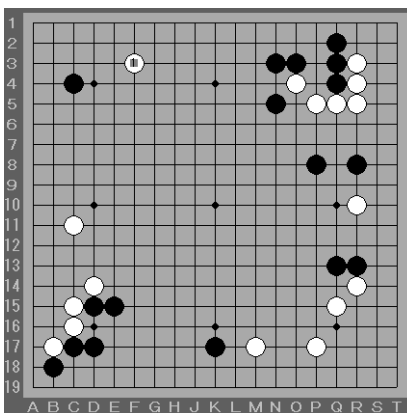
図-7のように白1と二間ビラキのカタをつけてから3とツケ4のハネに5 (Q-16)とフクラむのが軽妙、この後黒R-18ならR-15があるのが白1の効果で中央への影響力も意識した手順の妙である。対局者名を伏せれば現代の碁といってもわからないくらい洗練された配石だ。



〈図-8〉

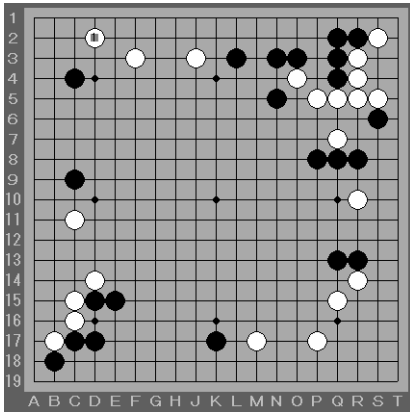
◎第3局 黒 利玄 白 算砂

図-8に至るまでに打たれた右下隅の白の構えは高目から目外しのシマリで隅に手は残るが辺や中央への影響力を重視したスケールの大きい打ち方で、現代のトッププロの対局でも時折用いられる。図の1と利かしてから3(R-3)と隅にツケた白も手順がうまく働きのある打ち回し。図から黒R-2にはQ-4とオサえてP-3が残る。



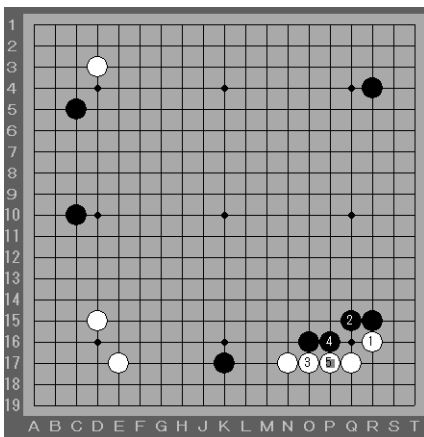
〈図-9〉

図-8から10数手進んだのが図-9、白が1(G-3)と大ゲイマガカリを用いたのが現代風だ。当時常識だった普通の小ゲイマガカリから一路ずらすという発想が江戸初期に試されたことが素晴らしい。1は右辺の黒の厚みを意識し、隅へのツケと辺へのヒラキを見合いにしバランスを重視して打たれた柔軟な一着だ。



〈図-10〉

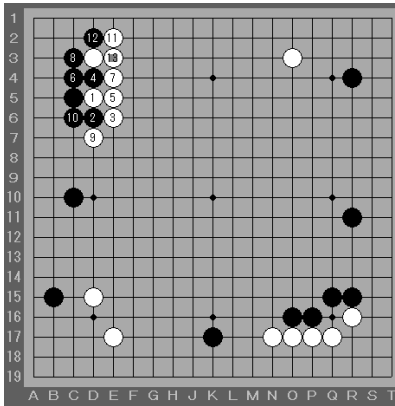
図-9に続いて右上隅での折衝があり白は隅の一団を安定させ続いて1(D-2)とスベって上辺の白の根拠を確かにしたのが落ち着いた好手。図-10から黒C-2なら白D-3と打って先手で切り上げることができるのが手順の妙。白1に代えD-3から打つと黒C-3白D-2の時に手を抜かれる。



〈図-11〉

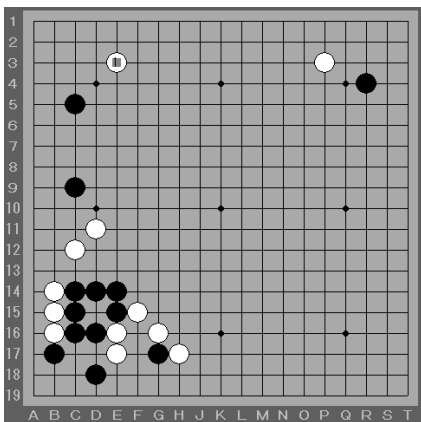
◎第4局 黒 利玄 白 算砂

右下隅で黒のカタツキ(O-16)に対し白が1とコスミツケてから3、5(P-17)としたのが堅実で算砂らしい。1を決めないと黒から三々にツケる手があるのでそれを防いだ地に辛い打ち方で、現代でも打たれることがある。



〈図-12〉

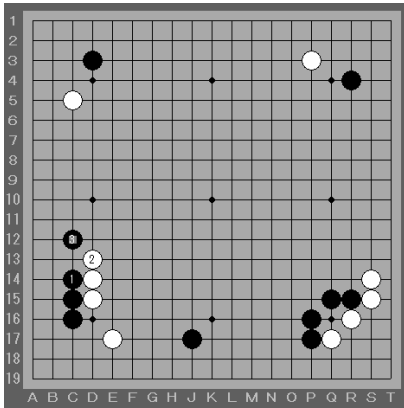
左上隅で白が1から3とし4以下を誘って13 (E-3)まで壁を作ったのが上辺の発展性に期待したスケールの大きな打ち方。3では5にノビが常識的だが、毎局こうした工夫を取り入れているのが素晴らしいと現代のプロは評する。



〈図-13〉

◎第5局 黒 利玄 白 算砂

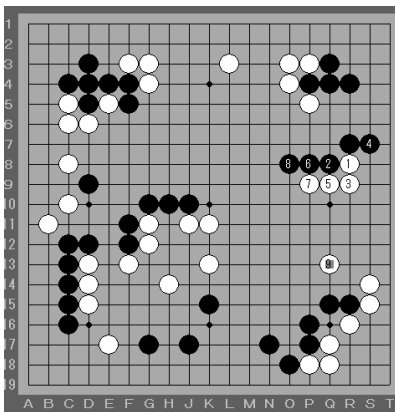
左上隅、黒が目外しに打った手に対する白1 (E-3)のカカリが工夫した一手で算砂の巧みなバランス感覚を示している。黒が隅を守れば辺に展開しようとする考えた。現代においても呉清源九段が目外しに対する簡明なカカリ方として推奨している。



〈図-14〉

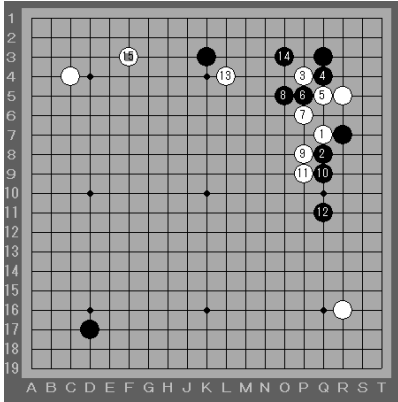
◎第6局 黒 利玄 白 算砂

布石の段階で黒が定石のC-13でなく1と3本ハッてから3(C-12)とトンだのが、定石の研究が進んでいる現代でも打たれる形。白に厚みを与える代わりに三々のツケを牽制し隅を味良く打とうという思想で「少しでも得できないかという工夫が毎局のように現れることは驚き、定石をあたかも禅の公案のように考え、向き合っていたのではないか」とトップ棋士は評する。



〈図-15〉

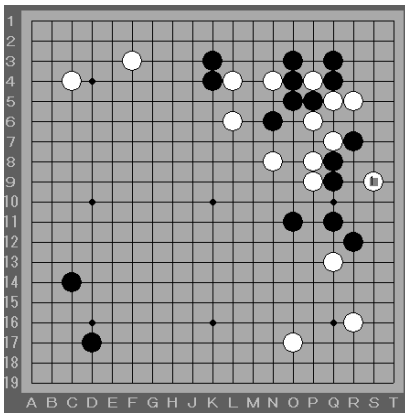
最後の大場となった右边で白が1とツケから入ったのが力強い打ち回りで、9(Q-13)まで白模様を築くことに成功した。1の代わりに3では黒石への響きが薄い。現代のプロでもこう打つだろうという手順である。



〈図-16〉

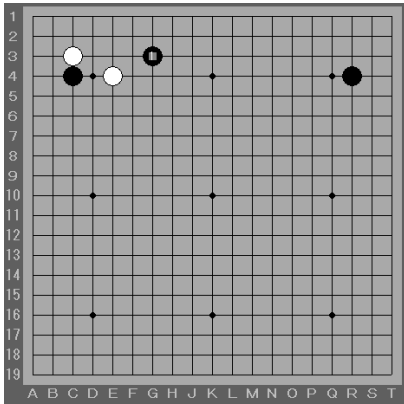
◎第7局 黒 利玄 白 算砂

右上隅黒のハサミに対し白1のツケから3の手順が軽快だ、11まで先手を取り13を一本利かせてから15 (F - 3) のシマリに回る、手順も感覚も洗練されている。



〈図-17〉

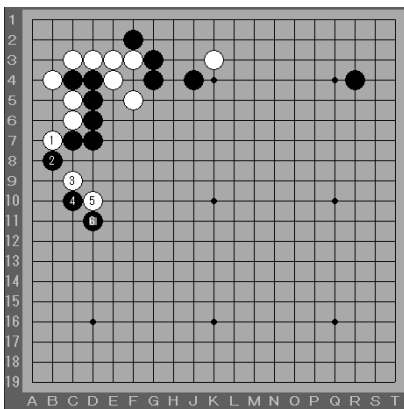
一見、手のなさそうな右辺の黒に対し白1 (S - 9) のオキが鋭かった。この急所に目が行くところが算砂のすごさだ。この後、利玄も手順を尽くして頑張り激しい戦いとなったが、終始主導権を握った算砂が制している。



〈図-18〉

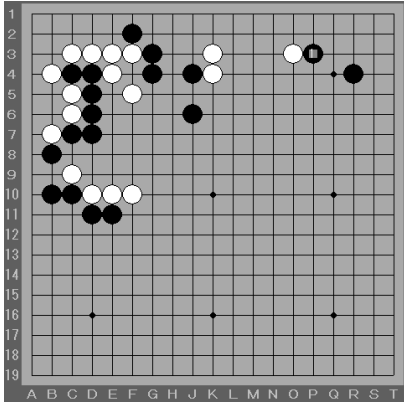
◎第8局 黒 利玄 白 算砂

算砂の好敵手利玄も随所に工夫を感じさせる打ち回しを見せ、棋譜の価値をおおいに高めている。図の1（G-3）が隅にこだわらず、右上隅の小目を意識した柔軟な発想だ。本局はここから2人の対局の中でも屈指の競り合いが始まる。



〈図-19〉

白1のハネに対して2のオサエは当然。そこで3に打ったのが切れないところをノゾいたようだが左辺と上辺の黒を両にらみにした遠大な構想。利玄も4と絶妙のツケで応え、以下5、6（D-11）と技の掛け合いで譲らない、本局のハイライトだ。

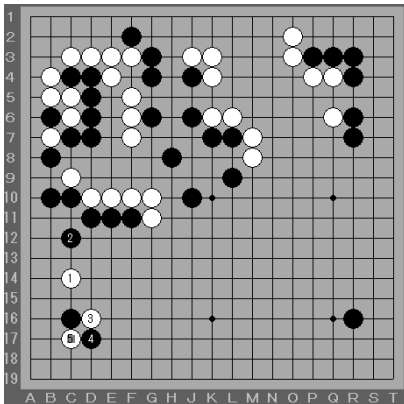


〈図-20〉

左辺と上辺が一息ついた後、黒が1（P-3）と横ツケしたのがうまい。定石のQ-3にコスんでも上辺の打ち込みが期待できないので、堅いところはさらに堅めさせ相対的に自分の石の効率を良くしようという考え。図19からの流れで競り合いが続く。

2-2 中盤以降の力強い打ち回し 好機を逃さぬ荒らし、シノギ、サバキ

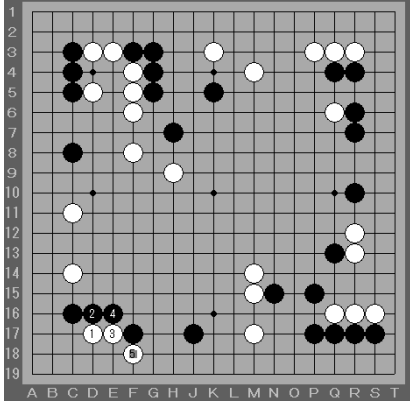
布石から中盤にかけての工夫も驚くべきものが数多くあったが、中盤以降においても好機を逃さず多彩な手筋を駆使している。引き続き算砂と利玄の打ち回しを検証して行く。



〈図-21〉

第8局、図-20の続き。双方の大石が収まった瞬間、算砂の白1が機敏だった。黒2と断点を補強した手に対し3から5（C-17）のキリチガイも軽いサバキで現代でも定石になっている。本局は布石が始まったばかりの図-18から中盤の終わり図-21まで、

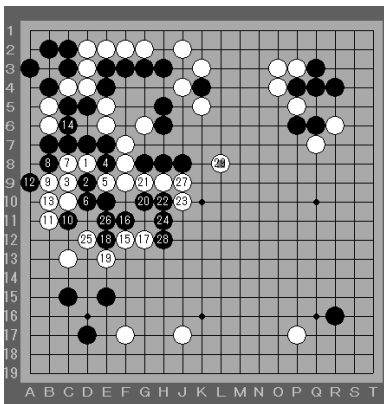
ゆるむところのない名局といえる。



〈図-22〉

◎第9局 黒 利玄 白 算砂

中盤、左下隅に1と打ち込んだのが盤上この一手。2のオサエに3～5（F-18）とエグって黒一団を攻める楽しみもあり白十分となった。本図の一連の手順は小目から大ゲイマにしまった形に対する荒らしの見本として現代にも受け継がれている。

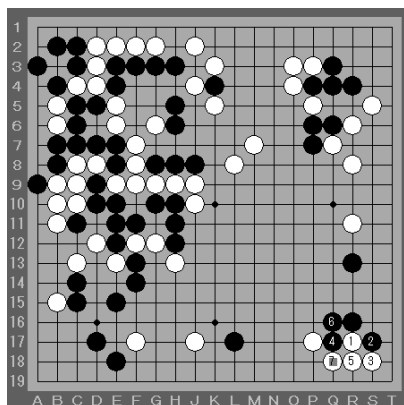


〈図-23〉

◎第10局 黒 利玄 白 算砂

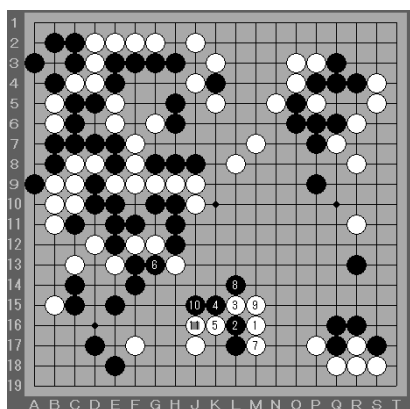
本局も中盤以降の力強さが目を引く。黒がE-10と打って左辺の白に迫って来たのに対し白1からの打ち回しが迫力満点で、左辺を捨て石にして29（L-8）と中央の黒一

団に襲いかかるのが雄大な構想だ。こうした中盤における読みの深さと競り合いの強さは現代のプロ棋士と遜色ない。



〈図-24〉

白が勝勢の局面ではあるが、黒L-17の打ち込みに応手を誤るとまぎれる。算砂は白1、3とツケ二段のシノギ、現代では常識となっているが7（Q-18）まで右下で簡明に根拠を確保した。黒は右上も、中央の大石も攻められる味が残っている。



〈図-25〉

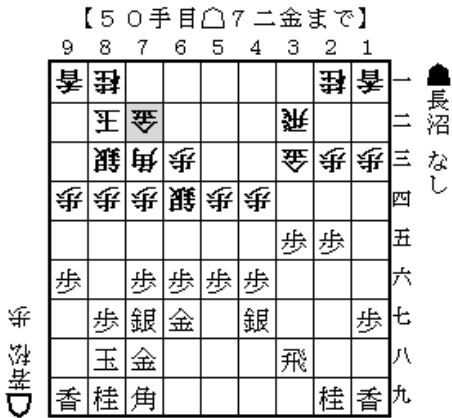
図-24で述べたように黒は2カ所に弱点があり下辺の白を攻撃する余裕がなかった。手番を握った白がG-13とツグ手を急がず1から決めたのが石の張りを感じさせる。黒は途中で6と手を戻す必要があり7（M-17）と2子を制して勝ちが決まった。利き筋を最大限に活用し、図-23から本図まで流れるような収束だった。

3 将棋師として 大橋宗桂（将棋一世名人）、大橋宗古（後の将棋二世名人）との将棋対局にみる算砂の実力と技術的功績

◎矢倉囲いの元祖は算砂？

本因坊算砂は将棋の一世名人大橋宗桂と将棋の対局で8局の棋譜を残している。成績は宗桂が7勝1敗と大きく勝ち越しているため、以前は「宗桂と算砂の手合いは角落ちに近い」とするプロ棋士による解釈がなされていたが、詳細に検討すると内容的には僅差のものが多く、事実とはかけ離れている。全8局の中でも最後の対局となった第8局はコンピュータを用いた解析でも終盤までギリギリの勝負となった好局⁷⁾であることが明らかになっているし、後述する大橋宗古との手合いも算砂上手の平香交じり。名人に角落ち下手の実力の棋士が、上手として将棋名人家の跡取りである宗古と対局するなどあり得ないことである。

最古期の棋譜の中で特筆すべきは、算砂その第8局で初めて「矢倉」という現代棋界でも主流となっている優れた守りの構えを用いていることである。図-26は1618年に行われた算砂と宗桂第8局の序盤の駒組みが完成した局面、先手の算砂が用いたのが矢倉だ。棋譜には「江戸城秀忠公⁸⁾御前」と対局場所が記されている。1612年に徳川家康によって囲碁、将棋の家元に俸禄が支給されることになってから6年が経ち、幕府の要人に家元としての技芸を披露するための対局だったと推測できる。徳川家康はこの時すでに死去していたが、囲碁将棋家元に対する庇護は幕末まで続いた。



〈図-28〉



〈図-29〉

図-26に良く似た構えを現代の棋譜から探してみた。図-28は1987年の長沼洋五段-若松政和七段戦（棋聖戦）50手目の局面。後手は振り飛車だが宗桂の組んだ陣形と異なり銀冠、ただし先手陣の玉、飛角金銀の配置はが400年前の算砂の構えと全く同じであることが驚きだ。この構えは相居飛車戦でも用いることができることを示したのが図-29、2003年の田中寅彦九段-南芳一九段戦（順位戦）である。玉、飛、角、金、銀の配置は図-28と同じ。相手が振り飛車でも居飛車でもほぼ同じ構えで対応できる、矢倉が汎用性の高い囲いであることが分かる。

◎将棋家元の後継者も育てる

続いて算砂と宗古の将棋対局を題材に、将棋家元となった大橋家と算砂の関係を分析していこう。宗桂はもともと算砂の門人で宗桂も囲碁の名手であったという説があるが、宗桂の囲碁棋譜は発見されておらず、二人の師弟関係を証明する確かな史料も見つかっていない。現在の史料から判断すると後世の創話の可能性が高いと見るべきだろう。一方算砂以外の当時の囲碁師が中将棋など将棋系の遊戯をこなしたという記録は貴族の日記にも残っている。前項で取り上げた、利玄が中将棋を後陽明院の下に参上し指したというのはその一例である。算砂の宗桂と残した8局の棋譜は有名だが、将棋家元の後継者大橋宗古と将棋を対局した棋譜も存在し、算砂の将棋の実力と格を知ることができる。

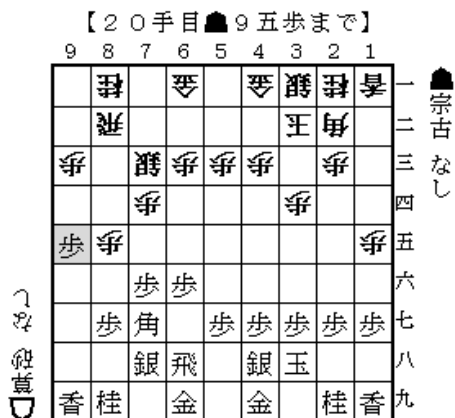
宗古は天正4年（1576年）将棋一世名人大橋宗桂の長子として生まれた。後に二世名

人となった宗古は「行きどころのない駒」や「打ち歩詰め」を禁手と定めるなど、あいまいだった将棋のルールの整備、また將軍家への献上図式『象戯図式』（通称・将棋智実）を作成するなど将棋界に多大な功績を残したことで知られる。

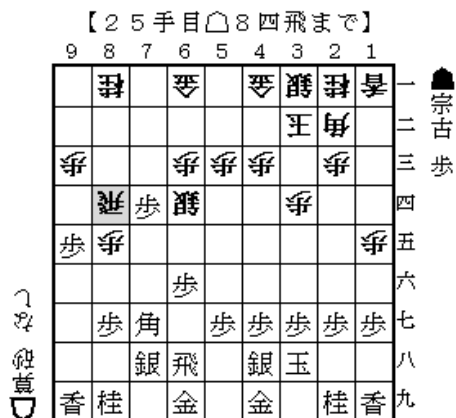
算砂と宗古は1619年から15番勝負を行った。大橋宗桂との最後の対局の翌年である。当時算砂は60歳、宗古は43歳。宗古は指し盛りの年齢でかなりの実力があつたと想定されるが、当時の名人は終生名人制だったため宗桂存命中は名人の地位に就くことはなく、宗桂と宗古の棋譜も残っていない。算砂と宗古の手合いは平香交じり（平手と香落ちを交互に指す）で算砂が上手を持っている。段位で棋力を表す方法は当時まだ考案されていなかったが、近代において平香交じりの手合いはおおむね二段差とされているから、算砂が格上だったことがわかる。

◎十五番指しにおける算砂の上手初白星

第7局 ▲大橋宗古－△本因坊算砂 1620年（元和6年）9月17日 於江戸城



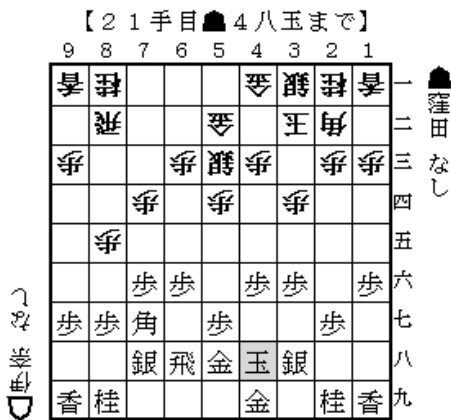
〈図-30〉



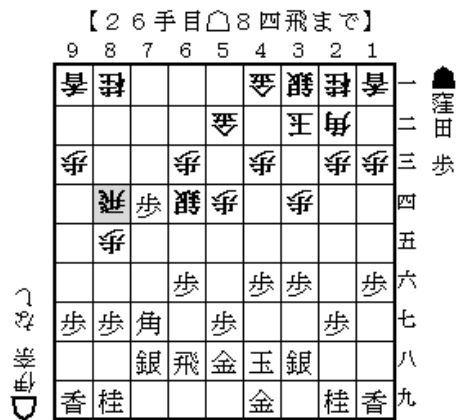
〈図-31〉

のちに二世名人を襲う棋才の持ち主だけあって宗古は算砂を大いに苦しめた。本局まで二人は6番戦い宗古が5勝1持将棋と圧倒していた。7局目は右香落ち⁹⁾、現在で香落ちといえば左香落ちだがこの時代は右香を落として指されることが普通だった。図-30は20手目、宗古が9筋の歩を伸ばした局面。香のいない弱点を攻めようという自然な構想である。一方上手は1筋の端を伸ばして玉の懐を広くしている。終盤になれば1筋の端を詰めたことが必ず生きてくると考えた算砂の大局観で、平均手数長い囲碁で

培ったバランス感覚ともいえるのではないか。図-30の下手陣の囲い方は簡略で現代の視点からは多少の違和感があるが、当時はまだ振り飛車の美濃囲いや穴熊は指されていない。ここから算砂は△7五歩▲同歩△6四銀▲7四歩△8四飛（図-31）と歩を突き捨ててから銀、飛を前線に進める急戦を仕掛けた。図-31は上手の6一金が離れ駒になっているため厳密にはやや無理気味の開戦ではあるが、算砂の将棋にはこうした強引な指し方が時折見られ、それが持ち味にもなっている。

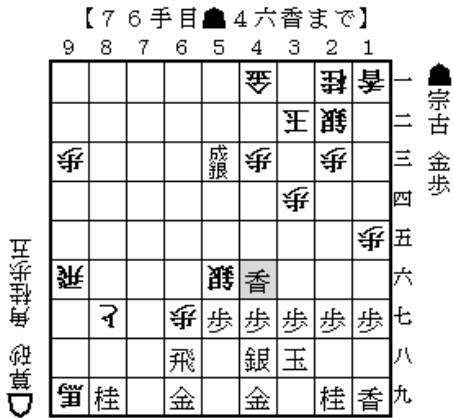


〈図-32〉

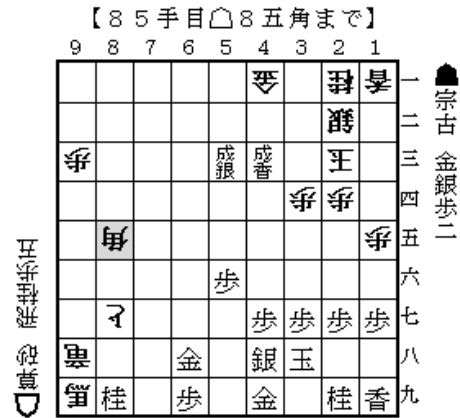


〈図-33〉

図-30から図-31に至る仕掛けに似た手順は現代の将棋でも数多く見ることができ。図-32は2004年の窪田義行五段 伊奈祐介四段戦（朝日杯）、後手の銀の位置が5三と7三の違いはあるがここから△7五歩▲同歩△6四銀▲7四歩△8四飛（図-33）と進む。足早な銀と飛による攻め方、6筋から8筋の駒の配置は宗古 算砂戦と同じである。本局で算砂が採った序盤における一手の違いを重んじ常に先行しようとする考えは現代将棋の思想にもつながるものであり、失敗があったとしてもこうした試みは評価されるべきであろう。



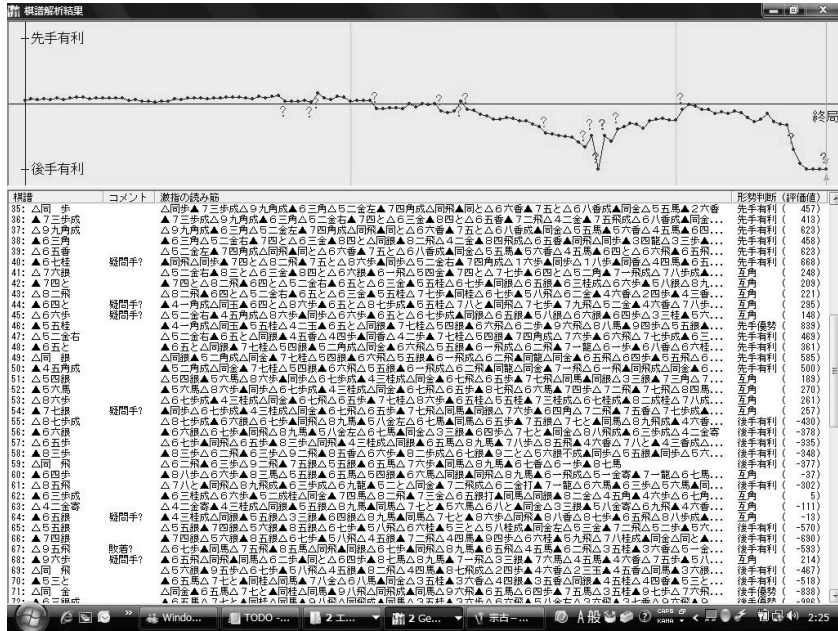
〈図-34〉



〈図-35〉

ときに攻めを急ぎ過ぎて形勢を損ねることもあった算砂だが、いったん優位を築いてからの指し直しには安定感がある。本局の終盤、図-34から△2四歩とした手は柔らかい受けの好手で、序盤で手を掛けた1筋の突き越しを生かしている。玉の懐が広がって宗古の逆転の望みはほぼ絶たれた。実戦は以下▲4三香成△2三玉▲5六歩△6八歩成▲同金△9八飛成▲6九歩△8五角(図-35)と進む。図-34におけるコンピュータソフットの評価値がマイナス1300点台(上手優勢)、図-35がマイナス2900点台(上手優勢)、良くなってからの実戦的な指し直しに算砂の豊富な経験を見ることができる。

本因坊算砂の人物像と囲碁将棋界への技術的功績を再検証する



〈図-36〉

図-36は本局の初手から終局までの形勢推移を将棋ソフト「激指11」¹⁰⁾に解析させたもの。香落ちのハンディは初形で約300点。ソフトも下手(ソフトは下手を先手と表示する仕様)やや有利を示しているが、図-31の無理気味の開戦で差が一時600点以上に開いた時点(下手有利)から、宗古の疑問手をとがめて算砂が僅差の中、終盤戦に持ち込んだのが読み取れる。評価値からは総じて算砂より宗古の指し手に細かいミス(疑問手)が目立ち、本局の結果も算砂が勝利するところとなった。右香を落とすハンディをくつがえし、急戦から自分のペースに持ち込んで後の将棋二世名人に勝った算砂の実力は、まぎれもなく当時のトップクラスだったことは明らかである。

4 総論

算砂らが囲碁将棋界に残した功績を最後にまとめ、今後の研究課題も提起したい。天下人である徳川家康との関係を良好に保ち、宗桂らと協力して囲碁師、将棋師を単なる遊戯の上手でなく、囲碁と将棋を盤上遊戯の両輪として正式な職業に認知させ、江

戸時代における囲碁界将棋界繁栄の基礎を築いたこと。

採譜の習慣を日本で初めて定着させ、後世の人たちに先人の歩みを知る機会を増やし技術の進化に寄与したこと。その棋譜は数十年前の評価は決して高いとはいえなかったが、今回の再検証で400年経った現代でも優れた内容であることが明らかになった。

将棋においても宗桂の好敵手として技芸の披露をするとともに、宗桂の子で後継者である宗古の相手を務め技術の向上に寄与、将棋家元制の存続に助力したこと。

上記のように算砂ら先人の功績が大きい故、同時代に書かれた日記や公文書で確認することのできないエピソードが江戸期の読み物に書き加えられたことは、囲碁史研究において留意すべき点である。中国で西晋の時代（3世紀）に成立した「三国志」（歴史書）と、さまざまな説話を取り入れ明代に成立した「三国志演義」の内容は当然異なってくる。それと同じことが算砂ら偉大なる先達の足跡をたどる際にもいえるだろう。香川氏が2008年に提起した問題を継承し、今後の囲碁史研究は史実と説話を仕分けしながら積み上げていく必要がある。

参考文献

- 『本因坊算砂の略伝』宮崎英修『法華』p.41-p.48 法華会 1951
- 『日本囲碁大系 第1巻 算砂・道碩』岩本薫 筑摩書房 1975
- 『爛柯堂碁話』（1、2）林元美、林裕（校注）平凡社 1978
- 『日本将棋大系 第1巻 初代大橋宗桂・二代大橋宗古』勝浦修 筑摩書房 1979
- 『囲碁古名人全集』福井正明 誠文堂新光社 2007
- 『本因坊算砂伝に関する諸問題』香川忠夫「囲碁史会」発表資料 2008
- 『囲碁語園』（上・下）増田忠彦 大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書 2010

〔注〕

- 1) 日淵は妙満寺に学び後に貫主となる。1578年に久遠院（後の寂光寺）を建立、1579年に安土宗論に参加した。
- 2) 会津藩主保科正之の臣、向井吉重編（1672年完成）。
- 3) 三条西公条の子で将棋駒作りの名手、「将棋馬日記」に735組の駒制作の記録。1602年89歳で没。
- 4) 禅寺で栄えた五山文学の中に相当数の棋詩が残されている。
- 5) 利賢は利玄と同一人物と考えるのが現在の囲碁史研究者の中で大勢である。同様に二世名人の道碩のことを道石と表記されている文書など、こうした例は多数存在する。
- 6) 当時は将棋のことを「象碁」あるいは「将碁」と表記することも多かった。引用文中の中象碁は12×12の盤、92枚の駒を使用する中将棋を意味する。
- 7) 「最古期の将棋棋譜の最新手法による再評価」古作登 大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要第14号 p67-p84 2012
- 8) 江戸幕府二代将軍徳川秀忠。
- 9) 駒を並べた時点で飛車側の香車を落として指すハンディキャップの付け方。
- 10) 世界コンピュータ将棋選手権で4回優勝したソフトの商品版。トップクラスのソフトがプロ棋士に近い実力を持つということは近年の人間対コンピュータの対戦で明らかになっている。